

花き

実況

1 キク

奥越の7月中旬の新盆咲きは、200～400箱で昨年ほどではないが、全体の開花は早い。旧盆咲小ギク「シューペガサス」、「小紫」等が7月下旬から出荷が始まっており、例年よりやや早く、昨年より5日程度遅い。暮植えのピークは7月下旬、春植えは8月上旬と予想される。ただし、7月上旬の高温により開花遅延がみられる品種もある。

今年で12回目を数えるJ Aテラル越前キク部会品評会は7月14日に審査が行われ、15日まで大野市のショッピングタウンで展示が行われた(写真1)。



写真1 J Aテラル越前キク品評会審査風景

暮れ植え作型のノーピン「小鈴」が105cm、葉数47枚、摘心4月25日ものエスレル処理で8月上旬開花。蕾数52、「小紫」116cm、葉数55枚、蕾数65個、「シューペガサス」108cm、蕾数28個、ノーピンで7月下旬、エスレル2回で8月上旬。

病害虫では、梅雨期間中に黒斑・褐斑病が少発生、白さび病が7圃場で発生、黒さび病が2圃場で発生していた。アザミウマ類による葉や花の食害が中発生、オオタバコガによる被害は、秋ギク「くるみ」等でみられる。勝山の一部でべと病、中輪の一部にアブラムシ類が中発生

坂井の春植え8月咲きギクは開花が7日程度早く、草丈が全体的に短い(調査日:7月13日)。あわらの5月5日定植の「小鈴」で草丈81cm(昨年92cm)、出蕾中。「めぐみ」92cm、50枚、蕾径3.8mm、「花絵」80cm、葉数51枚で、開花は8月15日頃である。春植えの「翁丸」は草丈46cm、葉数41枚であるが、暮れ植えは開花中で、草丈80cm前後である。アブラムシ類少発、アザミウマ類多発。一部に花腐病発生。

福井市の春植え盆ギクは(7/18調査)、二日市の4月18～20日定植の「小鈴」84.5cm、(103cm)、蕾径7mm(8mm)、「花絵」97cm(99cm)、4mm(昨年未発蕾)、「翁丸」67.5cm、蕾径8mmである。

福井市大土呂の「小鈴」79cm(85cm)、蕾径9mm(9mm)、収穫はじめてボリュームがやや小さい。「小雨」収穫終了(89cm、蕾径9mm)、「玉手箱」収穫終わり。「小紫」93cm(85cm)、蕾径8mm(9mm)、収穫はじめ。病害虫は黒斑病、ダニ類がみられる。東郷の小ギクはエスレル処理が行われており、草丈が79～84cmで、蕾径4～8mm。概ねエスレル処理を2～3回程度行った圃場では、開花が7月下旬～8月上旬になると予想される。病害虫では、黒斑病が少発生。一部でオオタバコガの幼虫に食害された跡がみられる。全体的にアザミウマ類が多い。

丹生の春植え(4月7～14日定植)8月咲きギクは、7月19日(14日)調査で「小鈴」草丈88cm(70cm)、蕾径6mm(4mm)で、昨年よりやや早い。「花絵」草丈107cm(84cm)蕾径5(3)mmで、8月中旬開花見込み(表1)。「やよい」、「恋心」、「はじめ」は収穫が始ま

っている。病虫害はカスミカメムシ類の食害が甚大。黒斑病がみられる。

南越の7月19日(昨年14日調査)調査で、「はじめ」74cm(99cm)、蕾径3mm(7mm)、「秀光」90cm、5mm、「恋心」93cm(89cm)、蕾径4mm(7mm)で7月下旬開花予定。

二州の暮れ植えギクの「小雨」、「みのる」等の品種は収穫終了した。春植え8月咲き小ギクは4月20日より定植され、7月13日調査時点で(昨年19日調査)「小鈴」が草丈89.2cm、蕾径5.0mm(昨年度草丈79.0cm、開花始め)、「花絵」が草丈101.8cm、5.2mm(昨年103.2cm、蕾径5.8mm)、「さざなみ」が草丈87.4cm、蕾径4.8mm(昨年90.4cm、開花始め)、である。病虫害は白さび痕がみられる程度である。

9月咲き小ギクの草丈は、「映虹」が草丈47.8cm(昨年69.6cm)、「おりがみ」が草丈62.8cm(昨年69.6cm)、「わかさ」が草丈48.2cm(69.6cm)と、昨年に比べ生育は遅れ気味である。病虫害は、キクモンサビダニによる紋々病が少発である。

若狭の暮れ植え作型の収穫はほぼ終了。春植え(4月17日定植、4月29、30日ピンチ、5月22日整枝)8月咲きギクは7月18日調査(昨年は7月20日調査)で、「翁丸」が草丈87.4cm、蕾径7.9mm(81.0cm、6.8mm)、「くれない」が草丈80.2cm、蕾径6.4mm(昨年72.6cm、幕切れ)、「しらかぼ」が草丈84.6cm 蕾径7.9mm(78.8cm花蕾膜切れ)で生育が良い。病虫害ではアザミウマ類、の発生が甚大。一部品種で黒斑病の発生がみられる。

露地の9月咲きキク(5月16日～定植)の草丈は7月18日調査(昨年7月20日調査)で「南月」が草丈52.2cm(昨年78.8cm)、「大信」が草丈56.2cm(昨年80.6cm)、「おりがみ」が草丈67.4cm(昨年105.4cm)で、病虫害ではアザミウマ類が少発生。中輪ギクに被害が多い傾向がある。施設の10月咲きギクおよび電照の11月咲きギクが7月上旬に定植した。「ようせい」「白馬」「おりづる」の草丈10.2～16.2cmで、アザミウマ類の食害が目立つ。寒ギクは「冬一番」「寒桜」「新年の美」が7月中旬に定植された。



写真2 「さきがけ」のアザミウマ類被害花

2 ユリ

奥越のシンテッポウユリ「オーガスタ」の切り下球根栽培は7月19日調査(昨年7月21日調査)で草丈118cm(108cm)、葉数155枚、花蕾数6.7輪で、昨年よりやや遅い。出荷始めは7月15日で、7月下旬が開花盛期と予想される。実生苗は62cm(46cm)、61枚(41枚)で、8月中下旬開花見込みである。葉枯病が切り下球根栽培にみられる。

あわらのシンテッポウユリ「オーガスタ」は草丈60～80cmで発蕾中。「雷山2号」は草丈10～30cmとバラツキが大きい。一部に葉枯病がみられる。

坂井市の「カサブランカ」は7月上旬で収穫終わり、草丈74cm、5輪、葉数64枚。



写真3 ユリ研修会(ユリーム)

7月7日に春江ユリームでユリ栽培研修会が開催され、ユリ生産志向農家が20名集まった。根腐れ等により、生育のばらつきが大きく、草丈20～30cmである。春江のユリは、ほぼ収穫が終了した。

3 トルコギキョウ

坂井の二度きり栽培は7月中旬までに出荷され、「バルカンリップス」「レイナホワイト」等は上旬にほぼ出荷が終了。「ロジーナホワイトⅡ」は品質が良かった。一部にヨトウ類、アザミウマ類がみられた。

本年は7月10日にハウスを開放し、近隣のこども園の花摘み体験が行われた。

奥越の春植えされた「ロジーナスノー」は60cm、12枚で発蕾しており8月上旬からの出荷が見込まれる。

南越の7月19日(昨年7月14日調査)調査で、盆用品種の収穫が始まっている。80cm程度。未開花の品種は100cm程度。



写真3 花摘み体験と体験の絵

二州で、11月定植の「ブルーシルエット」、「ピンクシルエット」は収穫中。美浜町の5月下旬定植の一部品種にチップバーンがみられる。

若狭では、3月上中旬播種、6月上旬定植の「あすかの雫」草丈17.6cm、「バルカンホワイト」38.2cm、「カルメンバイオレット」31.0cm。老化苗定植により一部で出蕾がみられる。

4 その他

あわら市の電照アスターは、9月彼岸出荷作型が7月上中旬に定植された。葉数7枚程度。

あわら市のストックでは「アイアン」シリーズが8月中旬に播種予定。

7月21日に敦賀市でキク栽培志向農家が集まり、直売についての研修を行った。



写真4 アスターの電照栽培

対策

1 夏期の灌水・高温管理

1) 本年は、5月～6月が高温気味に推移したため、マルチの中が乾燥している圃場も見られた。水分不足で肥効が悪く、急な降雨で逆に肥効が現れ、上部の葉が大きくなる株も見られる。この状態の時は根が弱っており、晴天時には萎ちょうする現象が起こる。あわてて地温が高い日中に灌水すると、根を傷める危険性が高いので、夜間か日の出前の地温が低いときに灌水する。

2) キクでは生育後半に、上部の葉が小さくなるウラゴケ症状や、新葉がやけるカ

ルシウム欠乏が出る株も見られる。晴天時の黒マルチ内温度は 45℃以上になるため、欠乏症がでやすくなる。マルチの一部を切って、穴をあけ、水を灌注する。灌水後の日中は排水溝に水が溜らないように、通路の再整備や溝を掘る等の排水対策を行い、根を健全に維持し、新根の発生を促すようにする。

- 3) 施設は日中、高温になるので、天窓、妻窓、裾窓を開放し、通風を良くする。また、換気扇、送風機等を設置して、ハウス内の空気を循環させるようにする。

2 秋植え夏ギクの苗づくり

- 1) 親株として用いる株は病害虫に侵されていない株とする。とくに、キクスタントウイルス、キクモンサビダニ（紋々病）、白さび病の発生兆候がある場合は適宜防除する。被害が大きかった品種は更新する。

黒さび病の発生がみられた地域では、ステンレス剤の予防散布を励行する。親株床の面積が少ない場合はトンネル被覆等で病菌を死滅させる。しかし、高温時（30℃以上）の散布は薬害のおそれがあるのでさける。カブラヤガの葉裏への産卵を抑えるため、適時防除するとよい。

- 2) 親株として用いる株は、採花前後も灌水、施肥、除草、防除管理を適宜行う。
- 3) 台刈り前には十分灌水を行い、1㎡当たりそさい5号で30g程度を施す。
- 4) 8月中下旬を目安に、親株を地上5cm程度の高さで刈り込む。

3 中輪キクのやなぎ芽の発生と処理

- 1) 9月咲ギクや秋ギクでは、7月下旬から8月上中旬に曇天、降雨などが続いた場合に発生する。定植時期が早い作型では発生しやすい。
- 2) 電照栽培では、停電などで3日間以上電照がストップした時や、電照期間が60日以上と長すぎた場合に発生が多くなる。
- 3) やなぎ芽の発生初期に1番上のわき芽だけを残し、不完全な蕾と他のわき芽を取り除く。なるべく早めに処置を行うことで、草姿がよくなる場合がある。

4 夏期の病害虫防除

夏期の農薬散布は、早朝か夕方の涼しくなってから実施する。また、農薬を複数の剤を混用した場合や、植物体がしおれた状態では薬害がでやすいので注意する。夕方の防除であっても、噴霧直後は熱水が出やすいため、ゴム手袋越しに温度を確認して防除を行う。また、前の薬剤がホース内に残っている場合があるため、最初の薬液は周辺の雑草等に試しかけを行う。薬害が出やすい農薬は薬剤履歴をよく確認して高温時の使用に注意する。

1) ハダニ類

薬剤は、抵抗性の発達を避けるため、系統の異なるハダニ剤を使用する。圃場の周辺の除草を行うことで隠れ場所をなくすことも重要である。特に7～8月は除草に手が回らないことが多いので注意する。

防除時は葉裏に薬液がかかるよう、噴口をななめ上向きとして防除を行うが、最下部はかかりにくいいため、防除前に除葉する。キクのハダニ類薬剤は、アグリメック、スターマイトフロアブル、ダニトロンフロアブル、コテツフロアブル、ダニサラバフロアブルなどを散布する。多発時は必ず殺卵力のあるバロックフロアブル等の殺虫剤を用い、発生数を減らして、殺ダニ剤を利用すると効果がある。同一系統の薬剤の近接散布は行わない。

2) アザミウマ類

破蕾期前より薬剤散布する。破蕾後の蕾の中にアザミウマ類が入った場合、防除は著しく困難になる。

薄暮時の散布効果が高い。付近の雑草や切り残し花が第一次発生源となるので除去する。

キクを加害するアザミウマ類はミカンキイロ、ミナミキイロ、ヒラズハナ、クロゲハナなど各種があるので、種を確認した上で、薬剤を選定する。ミカンキイロアザミウマ等は、キクえそ病を媒介するので特に注意する。

ミカンキイロアザミウマには、アフーム乳剤、カスケード乳剤などを散布する。それ以外の種にはハチハチ乳剤、プリンスフロアブル等を散布する。

3) アブラムシ類

夏は一時的に数が減少するが、秋には再び繁殖する。葉裏で越冬する個体もみられる。時々葉裏をチェックする。

同一薬剤を連用すると抵抗性がつき、効かなくなるので、系統の違う薬剤を計画的に使用する。とくにワタアブラムシは一生のサイクルが短く抵抗性がつきやすい。圃場の周辺から侵入するので、よく観察し、初期に駆除する。種類によっては、生長点付近のみ発生するもの、葉裏を主体とするものがあるため、同一方向での噴口の防除は避ける。

キクのアブラムシ類薬剤は、ウララ 50DF、アーデント水和剤などを散布する

5 スイセンの管理

- 1) 促成スイセンでは定植前から遮光ネット等を設置し、地温の低下を図り、発根と発芽を促すためスプリンクラーや灌水チューブなどによる散水を行い、地温・気温を極力低下させる。畝間灌水の場合は発根部位（球根の根盤部）まで水が回るようにし、回ったらすぐ排水にこころがけ、停滞水がないようにする。
- 2) 季咲スイセンは、9月以降、乾燥した場合は、葉の長さを確保するため、用水が確保できる圃場では灌水を積極的に実施する。

6 ストックの育苗と初期管理

- 1) 播種後の管理は雨よけハウス等で行う。ハウスで管理する場合は、高温対策のためにハウスの屋根の外側に遮熱ネット等を張り、ハウス内の気温を下げる。育苗箱はベンチ等の上で風通しを良くし、灌水は地温の低い早朝に行う。
- 2) 八重鑑別後、葉色が薄い場合は、OKF-1などの液肥を施用する。育苗日数20日程度の若苗定植を心がける。
- 3) 本圃は、クロールピクリンやガスタード微粒剤で土壌消毒する。
- 4) 本圃は、定植5日前からハウスの屋根の外側に遮熱ネット等を張り、ハウス内の気温を下げておく。2~3回に分けて十分に灌水して畝全体の水の通りをよくしておく。
- 5) マルチを張る場合は土壌水分が十分にあるときに、土面と隙間がないよう密着するように張る。隙間があると風であおられるばかりでなく、地温が高くなる。
- 6) 定植後は直ちに灌水し、液肥を施用し、活着を促す。
- 7) 直播栽培では、立枯れ性の病害を予防するために有機質肥料の施肥は早めに行い、栽培床に十分灌水しておく。また、播種時の地表面の温度を極力下げるため、播種の5日程度前から70~80%の遮光資材をハウスの屋根にかけて、風通しを良くして地温の低下に努める。播種後は土を乾かさないように灌水し、発芽後は苗の徒長防止のため、直ちに遮光資材を取り除き、灌水は土の表面が乾いたら行う。

8) 立枯れ性病害が発生した場合は、被害株を抜き取り、病原菌を調べる。立枯病（リゾクトニア菌）では、発病株を引っ張ると、地際からちぎれるが、ピシウム菌の場合は、引っ張ってもちぎれずに根がついてくる。立枯病（リゾクトニア菌）が発生した場合はリゾレックス水和剤を土壌灌注し、ピシウム菌が発生した場合はリドミル粒剤2を土壌表面散布する。

7 ハボタンの定植と初期管理

- 1) 切り花ハボタンは草丈を確保し、細く作り上げる必要がある。施設栽培の場合は、前作の肥料が残っている場合があるので、土壌分析を行ってから栽培する。露地栽培の場合は、基肥として石灰質肥料 10~20kg/a、窒素、リン酸、カリを成分で各 1kg/a 施用する。
- 2) 本葉が 2 枚の若苗の時期に、12cm 角ネットを使用し、1 マスに 1 株植えつける。苗が老化する前に直ちに定植する。
- 3) 定植後、活着するまではしっかりと灌水をする。活着後は、土の表面が乾いたら灌水をし、草丈確保のため、乾燥しすぎないように注意する。